

イエスは、パレスティナ農家の麦畑で、毒麦も一緒に育ってしまう問題を題材にして、たとえ話をされました。その話のなかで、毒麦を発見した僕達は「抜き集めておきましょうか」と進言しますが、主人は「いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい」と言いました。実際、毒麦は、小麦に良く似ていて見分け難く、成長すると互いに根が絡んでしまって、収穫の直前まで毒麦だけを上手に引き抜くことは難しかったようです。

たとえ話の説明(13:36～43)によれば、良い種を蒔く人は「人の子(イエス)」、蒔かれた畑は「世界」、良い種は「(神の)御国の子ら」、毒麦は悪魔の仕業によって実った「悪い者」とされています。イエスが良い種を蒔かれたこの世界に、毒麦、すなわち「悪い者」が同居している現実が言い表されているでしょう。しかしだからと言って、途中の段階で毒麦を見分けることが難しいように、人間の側が善悪を性急に識別し、分離することに対してイエスは「待った」をかけています。刈り入れの時、すなわち神が刈り取る者(天使たち)に命じて裁きを行う時まで待つようにと促すのでした。「愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。…あなたの敵が飢えていたら食べさせ、乾いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。」(ローマ12:19～21)とのパウロの言葉が思い出されます。イエスもまた、マタイ福音書5章のなかで、「悪人に手向かってはならない。だれかが右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。…父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ…雨を降らせてくださるからである」と言われました。とは言え、人間の感情や既存の常識から言えば、「居心地の悪い」言葉です。いっそ、その言葉に縛られず感じるままに毒麦を抜いた方が楽ではないか、そんな感情さえ芽生えるかもしれません。

ただふと思いますのは、私自身が「毒麦」でない確証はあるのかという事柄です(7:1～5)。イエスへの信頼を断言した弟子のペトロでさえ、師を見捨ててしまいました。聖書が示す「悪魔」の手口は、私達の欲を満たしてくれるような「居心地の良い」言葉で誘惑し、滅びへと向わしめる力のことです(4章)。たとえ話において、その悪魔が蒔いた「毒麦」が、神自身の手によってすぐには刈り取られないことの中に、主イエスの言葉に向き直して悔い改め(3:8、4:17)る時を待っておられる贖いの主の十字架の姿を見る思いが致します。この十字架の光に照らされた自己をこそ見つめつつ、裁きを主に委ね、主の言葉に従い行く者でありたいと願います。

(文責：望月達朗牧師)

